



支援員だより

発行者：山口県・公益財団法人山口県ひとづくり財団

もくじ

- P 1、2 支援員研修会の開催結果
- P 2、3 寄稿：「ギフチョウの保護活動」
「大地からの視点を取り入れて
動植物を見てみませんか？」
- P 4 自然保護課からのお知らせ

支援員研修会の開催結果

<第1回研修会>

- 1 日時：平成28年11月13日(日) 9:30~15:00
- 2 場所：浅江コミュニティセンター、浅江小学校(光市浅江)
峨嵋山自然研究路(光市室積)

3 参加者：39名

4 内容

◇ 午前は、浅江コミュニティセンターで、ひかりエコメイトの藪博昭氏による「西限のギフチョウと保護」、浅江地区コミュニティ協議会潮音寺山里山づくり推進部の加島実氏による「地域で取り組むニジガハマギクの保護・増殖」の講義を行った。その後、浅江小学校まで徒歩で移動し、児童が挿し芽で増殖したニジガハマギクの植え戻し場所を観察した。午後は、山口県植物研究会の眞崎久氏による「峨嵋山樹林について」の講義を行った後、室積公園駐車場に移動し、峨嵋山自然研究路で植物観察を行った。

◎ 「西限のギフチョウと保護」では、まず、ギフチョウとその食草であるカンアオイ類のプロフィールが紹介され、ギフチョウが減少している要因と、地域とともに実践している保護活動について報告があり、最後に山口県東部のギフチョウ生息域帯の連携等が提案された。

◎ 「地域で取り組むニジガハマギクの保護・増殖」では、ニジガハマギクの発見と命名のいきさつや、浅江小学校とともにやっている保護・増殖活動について報告があった。丁度開花期であり、浅江小学校では黄色から白色まで花色が変化に富むニジガハマギクを観察した。

◎ 自然観察会では、参加者が多いことから、代表的な植物を説明した後現地に移動し、植物名を書いた紙を講師が取り付け、それを見ながら観察した。スダジイ、ヤマモモ、クスノキ、タブノキ、ヤブニッケイなど照葉樹林を構成する高木とともに、カンザブrouノキ、タイミンタチバナ、ミミズバイ、サカキカズラ、ツルコウジ、オオカグマなど暖地性の強い植物が見られた。



ニジガハマギク



ギフチョウの幼虫から蛹へ



自然観察会の様子

<第2回研修会>

- 1 日時：平成28年12月4日(日) 9:30~15:00
- 2 場所：サンライフ萩(萩市土原) 笠山自然研究路(萩市椿東)
- 3 参加者：11名

4 内容

◇ 午前は、サンライフ萩で、萩市まちじゅう博物館推進部ジオパーク推進課の伊藤靖子氏による「笠山の環境と植物について」の講義を行った。午後は、笠山の虎ヶ崎付近まで移動し、伊藤靖子氏と自然観察指導員の斉藤みよ子氏の案内により、「笠山自然研究路」で自然観察会を行った。



コウライタチバナ

◎ 「笠山の環境と植物について」では、萩ジオパーク構想と関連して、阿武火山群の中での笠山の形成過程や年間の気温変化、さらに特徴的な植物相ができてきている理由などの説明があった。

◎ 自然観察会は、潮の干満によって水位が変化するエビ池で、塩水性植物のイワタイゲキとシバナを見た後、椿群生林を観察した。海岸では溶岩が流れた跡の溶岩堤防とダルマガクなどの海岸植物を観察した。国指定天然記念物のコウライタチバナ自生地では、コウライタチバナとタチバナが色づいた実をたくさんつけていた。

椿群生林から山頂に向かう途中の風穴周辺では、寒地性のコタニワタリと暖地性のフウトウカズラやバクチノキが混生しているのを観察した。寒地性と暖地性シダの雑種のカサヤマイノデ自生地では、踏みつけの影響を考え遊歩道からの説明のみとした。

他にもキンギンボク、ハマセンダン、カカツガク、リュウキュウマメガキ、ホルトノキ、タマシダ、ホウビシダなどの植物が見られた。

※詳しい報告は環境学習推進センターのホームページ「環境学習のひろば」の「学ぶ」をご覧ください。



海岸植物の観察



コタニワタリとフウトウカズラ

研修会講師寄稿

「ギフチョウの保護活動」

ひかりエコメイト 藪 博昭

ギフチョウはアゲハチョウ科に属し、「春の女神」と呼ばれる美しいチョウです。幼虫の食草はカンアオイ類のみで、食草なくしてチョウの種の継続はありません。カンアオイ類は木漏れ日を好み、成長が非常に遅く、種子の拡散力が弱い植物です。行動範囲が狭い幼虫にとって、食草の密度が低ければ餓死します。また、天敵のクモ、アリなどがいて卵から羽化までの生存率は数%から10%と言われています。県ではギフチョウを絶滅危惧種Ⅱ類に指定していますが、日本鱗翅学会の最近の調査結果では絶滅と考えられる地域があり、Ⅰ類に該当すると発表しています。

ギフチョウの翅の縦縞模様は生息地域で特徴があり、地域が特定できます。生育の西南限である山口県は、通販の商品としても全国注目の地域であり、ネット上でのリアル情報や一時の格安高速道路料金の影響で過重な採集圧がかかり急速にチョウの姿を見る機会が減りました。

光地域では名刹の寺院で欄窓にギフチョウとカンアオイを彫り込んだ山門があり、地元小学校では副読本に「ギフチョウの里」として取り上げ大事にしてきました。また、学校では観察会と放蝶会を毎年開催しており、地域の人や保護者と協働して食草の植栽とギフチョウの保護に務めています。なお、地元光市では環境基本計画にギフチョウの生息環境保全を掲げています。

当会では、当初は自然界でも成虫を容易に確認できたので観察会を中心に活動を開始し、近隣の山ではチョウ道に沿って観察しました。次に、森林組合等と協働して保全林の間伐・除伐・枝打ち・下草刈りを行いチョウの飛翔環境と食草の生育環境を改善しました。しかし、山道脇の産卵した株が根こそぎ盗掘される事態が発生し、自然界での保護だけでは滅亡の危険性が高いと考え、人工飼育に着手しました。昆虫や植物の専門家と愛好家の指導と支援をいただき、人工飼育と放蝶を始めました。人工飼育の場合は生存率が30~70%と向上するので、食草の増殖ができれば自生状態に回復できると思っています。ただ残念なことに、放蝶で自然羽化の回復の兆しが少し見え始めた矢先、飼育ケージに侵入されて産卵した株ごと盗難に遭い、仕方なくケージに施錠し保護することとなりました。

最後に保護活動について提案します。

- 1) 食草の保護増殖を図る。
- 2) 保護地域間の情報交流と連携を図り、適切な連続した生息場所の回復を図る。



ギフチョウの成虫

3) 採集の自粛を呼びかける。

4) 山口県東部はギフチョウ生息域と食草の生育地の分布が重なる地域であり、生息広域帯を守ることが重要で「山口県東部のギフチョウ生息帯の連携」を図る。

5) ギフチョウの衰亡地域でも食草が豊富に生育する地域では、「ギフチョウUターン運動」を進めていく。



食草のカンアオイ



ギフチョウの産卵



小学生の観察会

「大地からの視点を取り入れて動植物を見てもみませんか？」

萩市ジオパーク推進課（萩ジオパーク構想推進協議会） 伊藤 靖子

「ジオパーク」という言葉をご存知ですか？「ジオパーク（geopark）」とは、ジオ（地球）に関わるさまざまな自然遺産、たとえば、地層・岩石・地形・火山・断層などを含む自然豊かな「公園」のことです。山や川をよく見て、その成り立ちに気付くことに始まり、生態系や人々の暮らしとのかかわりまでをつなげて考える場所です。地球を丸ごと考える場所、それがジオパークです。（NPO法人 日本ジオパークネットワーク・リーフレットより）

2008年に初めて7つの日本ジオパークが誕生しました。2016年9月現在では、全国に43の日本ジオパークがあり、うち8つはユネスコ世界ジオパークに認定されています。県内には Mine 秋吉台ジオパークがあり、さらに萩市と阿武町の全域と山口市の一部をエリアとした萩ジオパーク構想が、日本ジオパークの認定をめざしています。萩では、「火山に育まれた萩の大地の歴史を学び、今に生かし、未来へ伝える」をテーマとして、「保護保全」、「教育」、「地域振興」を柱とするジオパーク活動を官民一体となって推進しています。

萩ジオパーク構想の見どころの一つである笠山は、活火山である阿武火山群の中で、約8800年前に噴火した最も新しい火山です。安山岩の溶岩台地の上にスコリアという軽石の一種が降り積もった丘が載った形で、山頂には噴火口があります。

日本海を流れる対馬暖流の影響を受けた温暖な気候により、日本では笠山にしかない柑橘類のコウライタチバナや、バクチノキやホウビシダといった数多くの暖地性植物が育っており、加えて火山地形が生んだ「風穴」という夏に冷風が吹きだす場所がコタニワタリやホソイノデといった寒地性植物の生育を可能にしています。暖地性植物と寒地性植物が混在する環境は他では見られないものです。

笠山山麓北端の樺群生林のヤブツバキは、明治以降に薪炭の原料として伐採されたことによる萌芽更新のため、枝分かれをしています。またヤブツバキや群生林内のエノキ、ハマセンダンなどは溶岩の岩盤の影響で根を深く伸ばすことができないため、根を板のようにし、横に這わせ、倒れないように成長しています。火山地形がもたらした形状といえるでしょう。

身近すぎて普段は気に留めることもあまりない大地ですが、その成り立ちを踏まえて動植物に接すると、生態や分布への理解が深まるのではないのでしょうか。



笠山全景



根を這わせた樹木



笠山の火口内部

◆野鳥の高病原性鳥インフルエンザへの対応について

高病原性鳥インフルエンザ（以下「鳥インフル」とします。）に罹患した野鳥については、ニワトリなど家禽への病気の伝播や、希少な野鳥の生息に影響を及ぼす恐れがあることから、国や県では野鳥の監視体制を整備しています。

具体的な取組としては、環境省が定める対応レベルに応じ、県民の皆様からの情報収集や野鳥生息地の巡回等を実施しています。死亡野鳥が発見された場合にはウイルス検査を実施し、陽性と確認された際には、発生地から10km圏内の野鳥の監視強化や養鶏場での防疫体制の徹底などを図っています。

死亡野鳥等のウイルス検査については、①鳥インフルへの感受性が高い種、②過去に国内外での死亡例がある種、③集団で生息する種、④肉食の種、⑤ユーラシア大陸から渡ってくる種など感染の可能性が高い種（リスク種）を優先し、対応レベルごとの個体発見数に応じ検査を行っています。

◇リスク種の概要

●リスク種1（18種）※主に早期発見を目的とする	
カモ科（ヒシクイ、マガン、シジュウカラガン、コバクチョウ、コハクチョウ、オオハクチョウ、オシドリ、キンクロハジロ） タカ科（オジロワシ、オオワシ、チュウヒ、ハイタカ、オオタカ、サシバ、ノスリ、クマタカ） ハヤブサ科（チョウゲンボウ、ハヤブサ）	・鳥インフルに感受性が高く、死亡野鳥等調査で検出しやすいと考えられる種 ・H 22～23年の発生時に感染が多かったハクチョウ・ガン・タカ類の主な種
●リスク種2（17種）※さらに発見の可能性を高めることを目的とする	
カモ科（マガモ、オナガガモ、トモエガモ、ホシハジロ、スズガモ） カイツブリ科（カイツブリ、カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ） ツル科（マナヅル、タンチョウ、ナベヅル） クイナ科（バン、オオバン） カモメ科（ユリカモメ） フクロウ科（コノハズク、ワシミミズク、フクロウ）	・過去に感染死亡例のある種をより幅広く含める
●リスク種3 ※感染の拡がりを把握することを目的とする	
カモ科（リスク種1、2以外全種） ウ科（カワウ） サギ科（ゴイサギ、アオサギ等全種） タカ目（リスク種1、2以外全種） ハヤブサ目（リスク種1、2以外全種）	・水辺で生息する鳥類としてカワウやサギ類、リスク種1あるいは2に含まれないカモ・カモメ類、タカ・フクロウ・ハヤブサ目の種
●その他の種	
リスク種1～3以外の鳥種すべて	

◇発生状況に応じた対応レベルの概要

対応レベル	鳥インフル発生状況	ウイルス検査を行う個体発見数（※1回の発見数）				備考
		リスク種1	リスク種2	リスク種3	その他の種	
対応レベル1	通常時	1羽以上	3羽以上	10羽以上	10羽以上	※近隣国発生時等には対応レベルを2または3とする
対応レベル2	国内発生時（単発時）		1羽以上	5羽以上		
対応レベル3	国内複数箇所発生時					

《参考》自然保護課ホームページ「野鳥が死んでいるのを見つけたら・野鳥との接し方について」

URL：<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a15600/yochonoshi/20080509001.html>

◆特定外来生物の追加指定について（外来生物法）

特定外来生物にハナガメなど24種が追加指定され、平成28年10月1日から、飼養、栽培、保管、運搬、放出、輸入等が規制されています。



▲ハナガメ※写真は環境省資料より

◇追加指定種（24種）※特定外来生物は全132種

分類	種名
爬虫類（5種）	ハナガメ、ハナガメとニホンイシガメとの交雑種、ハナガメとミナミイシガメとの交雑種、ハナガメとクサガメとの交雑種、スウィンホーキノボリトカゲ
両生類（4種）	ジョンストンコヤスガエル、オンシツガエル、アジアジムグリガエル、ヘリグロヒキガエル
魚類（12種）	ブラウンブルーヘッド、フラットヘッドキャットフィッシュ、ホワイトパーチ、ラップ、ラウンドゴビー、ヨーロッパナマズ、かわかます科全種、かわかます科に属する種間の交雑により生じた生物、ガンブスピア・ホルプロオキ、ナイルパーチ、オオタナゴ、コウライギギ
植物（3種）	ビーチグラス、ツルヒヨドリ、ナガエモウセンゴケ

